

翻刻 『天神の法楽』

早稲田大学近世貴重本研究会

伊藤善隆  
野村亞住  
二又淳  
宮脇真彦

〈解題〉

はじめに

本稿では、平成二十一年度に新収となった『天神の法楽』（円立著・立圃点 寛文五年三月立圃奥）を翻刻する。本書は、立圃（文禄四年〔一五九五〕～寛文九年〔一六六九〕）が、門人である円立の独吟千句に加点したものの、奥書に立圃自身が「老て目も耳もうときゆへ」と述べてもいるように、立圃晩年の批点である。

書誌

書型…横本。

装丁…袋綴。

冊数…一冊。

表紙…藍色 雷紋摺出模様原表紙。一三・五糎×二〇・〇糎。

題簽…左肩無辺原題簽。「天神之法楽千句譜」。

一〇・〇糎×二・八糎

内題…なし。

匡郭…無辺無界。

字高…一二・〇糎（ただし、本文一行目の発句を計測）。

柱刻…なし

丁数…本文四〇丁、奥書一丁、計四一丁。

行数…本文は毎半葉一四行、奥書は一二行。

奥書…「寛文五年三月中旬 立圃」。

版下…未詳。ただし、奥書は立圃自筆版下と認められる。

刊記…なし。

旧蔵者…前表紙見返しに旧蔵者の書き入れがある。

「 花頂山花見 芦錐

#### 連歌

咲みちて／花より外に色もなし 左大臣足利義政公

はるの雪間か／山の鳥の音 一条殿

出そむる月を霞の／うへに見て 三宝院殿

連歌の記事を写したのと同筆で「芦錐」の書名がある。

芦錐は、あるいは酒田の俳人、柳眼窟芦錐（大泉氏。通

称、越後屋藤十郎。宝暦元年七月二六日没）であろうか。

伝存する芦錐の短冊<sup>(1)</sup>と比較するに確証が持てない。

また、第一丁表ノドに「□□東西南／北雲」、後表紙

見返しノドに「亀富堂／光信」と、三カ所とも別筆によ

翻刻『天神の法楽』

る書き入れがある。

#### 円立の経歴

円立（生没年未詳）は、立圃門の俳人で京都の人。今井氏、了三と称した。『誹諧作者之名寄』（寛文十一〜十二年頃刊）には「立圃」門として「今井了三」と記載がある。

そこで、円立の入集履歴をたどりつつ、立圃との関係を追ってみると、まずは、寛文五年の正月に、立圃門の生白・昌房らの俳人たちと歳旦三物を興行していることが注目される。ついで同年三月に、この『天神の法楽』が成立していることがわかる。その後、同年八月の奥書を持つ『小町踊』に七一句が入集。翌、寛文六年正月からは、立圃と共に歳旦三物を興行している。その歳旦三物興行は、立圃が没する寛文九年の正月まで続くのである。すなわち、この『天神の法楽』が刊行された寛文五年という年は、円立と立圃の親密な交渉の始まりの年だったといふことになる。

参考に、以下、円立の諸俳書への入集履歴を示す<sup>(2)</sup>。なお、寛文四年まではすべて「了三」号、寛文五年以降はすべて「円立」号での入集である。

慶安元年

○『山之井』（季吟編 八月刊）に発句一入集。

慶安四年

○『崑山集』（令徳編 八月刊）に発句二入集。

寛文元年

○『烏帽子箱』（立以編 十一月立圃序）に発句一七入集

※句引に「山城国」「今井」。

寛文四年

○歳旦発句あり（『歳旦発句集』表紙屋庄兵衛 延宝二年刊）。

寛文五年

○歳旦発句あり（『歳旦発句集』表紙屋庄兵衛 延宝二年刊）。

○生白・昌房・釣玄と歳旦三物を興行（『歳旦帖 知足書留』）。

○『天神の法楽』（三月奥）百韻十卷に立圃の批点を請う。

○『小町踊』（立圃編 八月奥）に発句七一入集。

寛文六年

○歳旦発句あり（『歳旦発句集』表紙屋庄兵衛 延宝二年刊）。

○二条太閤様（二条康道）・立圃と歳旦三物を興行（『寛文前後古俳諧』）。

古俳諧）。

※なお、同時に、二条太閤様・立圃・昌房の歳旦三物が

興行された。

寛文七年

○歳旦発句あり（『歳旦発句集』表紙屋庄兵衛 延宝二年刊）。

○立圃・昌房と歳旦三物を興行（『寛文前後古俳諧』）。

寛文八年

○立圃・昌房と歳旦三物を興行（『寛文前後古俳諧』）。

寛文九年

○歳旦発句あり（『歳旦発句集』表紙屋庄兵衛 延宝二年刊）。

○立圃・昌房と歳旦三物を興行（『寛文前後古俳諧』）。

寛文十年

○歳旦発句あり（『歳旦発句集』表紙屋庄兵衛 延宝二年刊）。

○卜圃・来安と歳旦三物を興行（『寛文前後古俳諧』）。

※卜圃は昌房の改号後の号。

○『俳諧詞友集』（種寛編 三月刊）に発句四入集。

※句引に「山城国」「今井氏」。

寛文十一年

○歳旦発句あり（『歳旦発句集』表紙屋庄兵衛 延宝二年刊）。

○『蛙井集』（清勝編 正月刊）に発句二入集。

※肩書に「京」。

寛文十二年

○『続大和順礼』（正辰編 六月刊）に発句二入集。

※句引に「小町踊之内」。なお、「河内」「山田住」として入集する「了三」は別人と推定される。

○『続詞友俳諧集』（種寛編 八月刊）に発句三入集。

※句引に「山城国」「今井」。

延宝五年

○『唐人躍』（立圃編・友貞補編 十一月刊）に発句三五入集。

※句引に「山城国」「今井氏」。

貞享五年

○『四季題林後集』（蛙子編 九月刊）に発句六入集。

おわりに

以上簡単ではあるが、解題を記した。本書は、立圃の俳諧を考えるに絶好の資料であるばかりでなく、貞門期の俳諧千句としても貴重な存在であることから、ここに翻刻を試みることにする。

注

(1) 致道博物館『松尾芭蕉と奥の細道(図録)』（平成元年十月）所収の短冊参照。

(2) 今栄蔵『貞門談林俳人大観』（中央大学出版部 一九八九年二月）、雲英末雄他編『元禄時代俳人大観』（近世文芸 研究と評論）第四十四号（近世文芸研究と評論の会 一九九二年六月）以後連載中）による。

(いとう よしたか

湖北短期大学准教授)

(のむら あずみ

教育学研究科博士課程在学)

(ふたまた じゅん

明治大学非常勤講師)

(みやわき まさひこ

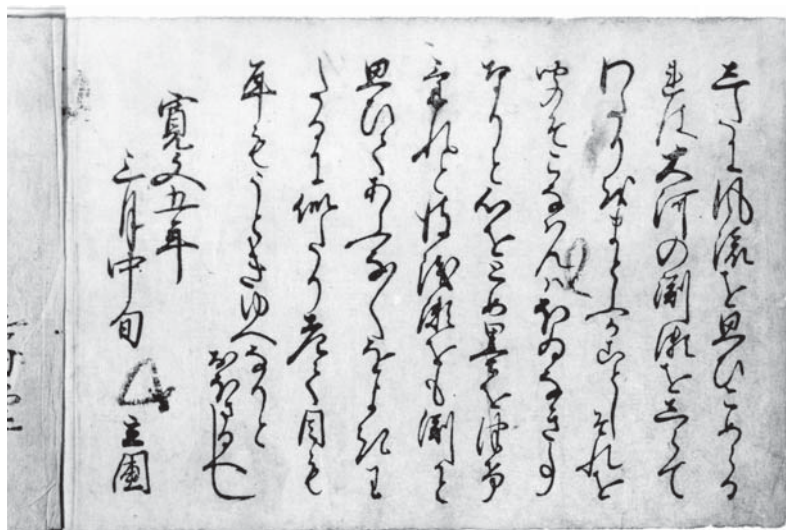
教育・総合科学学術院教授)

〔凡例〕

翻刻にあたり、原則として異体字・旧字は通行の字体に、「ハ」「ミ」は「は」「み」と改めた。また、濁点を私に付した。その際、原本に濁点のある場合はママと傍書して区別した。



(表紙)



(卷末・奥書)

〔翻刻〕

第一

賦何袋誹諧連歌

円立

へ紅梅のちしほにあまる匂ひ哉  
 へ仕立て着なす正月小袖  
 へ朝霞晴なる能を催して  
 殿の御成の機嫌うかゞふ  
 す、みしは他にことなりし官位  
 へ和歌所とてえらばる、人  
 へ管絃の役をや月に定むらん  
 へ龍をいさむる秋の雨乞  
 霧ふかき谷に筏をからくみて  
 山よりさとに出る大石  
 へ地震にはかねてならざる身用心  
 へ仕かくる火矢のならばかずぐ  
 唐船や湊に近くよせぬらん

翻刻『天神の法楽』

〔一オ〕

へ親子の中の縁はふかしも  
 へ堀あつるこがねは世々の宝にて  
 へ見あかざりけり筈のなり  
 へうつくしき顔にまざる、髮姿  
 へ声におとことしるき若衆  
 へ関の戸をいかでぶさたに守るべき  
 へ沖をはるかにいそぐ御座舟  
 島山の花見や月におぼすらん  
 へ春に開帳なす弁財天  
 注連縄を引はえかざる蔵の前  
 へ物ずきなれや数の馬道具  
 へおもむくはまだうる旅の用意にて  
 他国のわかれうき宮づかへ  
 眉目よきに立しあだ名をす、ぎ兼  
 へ似合の縁をたのむ若後家  
 へいかでかは親の仰をそむくべき  
 へ思ひ入てもかへぬ宗門  
 繁昌の里にならべる一在所

〔一ウ〕

へこしらへた、ん市のうりもの

それ／＼に衣類の尺を定め置

へあり／＼しくもつかふ人形

へぬく太刀は月とか、やくのろひごと

なみだの露にしづむ後妻

身にしめて思ひ出さる、若盛

へちからのほどは何相撲の手

へあらそひの位は是非のさだまりて

ながされてゆく罪やかなしき

へ闇の夜にまよふ弘誓の舟の道

たのまではやは観音の願

へ巻／＼の心はふかき物がたり

へ相伝せしは重藤の弓

へ役義をば子に譲るべき御隨身

程とをかれや行幸の道

へ乱世の時は月さへさえやらで

へ花をあるじの詠歌いとをし

古塚は名々字ばかりのどめかし

へ春の野となる炎上の寺

見かへりて拝むや奈良の大仏

馬をはるかにいそぐ配軍

関舟を沖の波間に漕出し

へ島に残りてあはれあしずり

売までは何心なくかどはされ

見かぎりあはぬ傾城はうき

へ書くる文をしか／＼取あへず

へまいりて直にきかん内談

へ理公事とて心まかせにならばこそ

常にしたしき中のかしがね

伊勢講を結びしもはや年ふりて

いづれをとらぬ市の仕合

へ浜づたひ月の夜舟は風次第

へとるにか、らぬ初塩の魚

へいかばかり新酒に蓑をかゆべきや

菊さきつゞく加賀や越前

虫の音のしげき山路はうそさびし

〔2オ〕

〔2ウ〕

〔3オ〕

へなきか死骸のけぶりたえぐ

へ責られて落る城こそ哀なれ

へ拷問はうきものゝふの科

ありなしも誓紙に分ぬ二心

へ衆道の義理は捨がたき物

へふり袖を老たる肌にかさねきて

へ寝とほけぬるや月の夜這人

朝霧に乗べき船を見そこなひ

露にそぼつく瀬田の長橋

へ石山の花には心いそがはし

かすみにまよふ順礼の友

春こそとねらふ敵を討もらし

へさけてせんなき鉄炮の筒

獣のほえぬる声はすゑ遠み

へ化そこなひの狐何そも

へをのが身の驕りをしらぬ一夜妻

伽羅のにはひにふかき密夫

着る物はたゝみながらの部屋の内

へよそ目をおもふ祝言の時

まゝしきを家の世継と生立上

へかねて隠居をのぞむ奉公

かりそめの病は治せぬおこりさめ

へおもかけは身のつきものとなる

へおそはるゝ夢は月にも覚やらで

へあたゝめ酒のゑひはおかしも

へ一曲の舞に紅葉をさしかざし

かざり立けり音楽の船

へ海中の玉はたやすくあがらめや

へ岩間くゝによるあはび貝

人倫は見るにまれなる隠岐の国

へ左遷のうさを思へあけくれ

へ言の葉の花を百首に顕して

へのどけき御代や堀川の院

付墨六十一句

内長八



第二 何智

田立

- へ花ははなちらぬ都の遊山かな  
へ柳のえだに付る短尺  
へ三月の節句の礼義ことぶきて  
座敷にならぶ一門の中  
へ約束を家の養子と定められ  
へ秘伝のこさぬ芸の器用さ  
賤しきも月待場に召出され  
あたゝめ酒に酔るめんく  
へいつの秋あふべき旅の暇乞  
へ左遷となるも傍輩の中  
逆心の科を不思議に言のがれ  
神の御前にはどく宿願  
平産の紐は程なく忌明て

〔5オ〕

- へ眉目よきからになをる本妻  
さかしらの口舌はうそとしれけらし  
まゝしきとても思ふ孝行  
氏よりもおさなき時の生立やう  
へよく書得たり文字の真草  
へ唐人に言葉の品の通じかね  
吹ながさるゝ船の難風  
へ怨霊の恨を月にあらはして  
へ露ときゆるや閨の油火  
へすきあひの窓より虫の飛めぐり  
軒に垂木に懸る蜘蛛の巣  
守人のなき御社はうそさびし  
へ子孫たえしはあたら名將  
遁世は何のゆへにてあるやらん  
へなじみ久しきつれあひの中  
へかしこきはあしき形の身を恥て  
へのぞまぬさきに立順の舞  
へ盃をいたゞく首尾を見繕ひ

〔5ウ〕

へ利潤をまけて中をなをらん

幼少のころより頼む師を思ひ

へ宿を引のく寺の門前

へ帰るさの月見にしばし荷ひ茶屋

霧にはぐれし友をまつ陰

へ天狗すむ山と聞より冷じみ

へきりて出さぬ谷の材木

河下の湊に船の入つどひ

へなにはの浦にかざる市棚

へ我妻としらぬまはうき物語

へ寝そびれにける夢はおかしも

月もさぞいたづらわざとおぼすらん

夜さむわする、辻立のくせ

へ門番の役目は露もかけやらで

へ名乗たゞしき城の出入

へ軍配にそなへくの物がしら

それとかくれぬ君の御座舟

楽の音に花や吹そふ嵐山

「(6オ)

へ紫雲かすめる来迎の空

初夢はさめて思ひの玉の数

へ悔みてかひのなき出家おち

へはらみしをながすことこそ罪ならめ

いかに嫉妬のふかき奥方

へ若衆の心の中もはづかしや

いたむをこらへかぬる引疵

へ鋸のせめや難義に思ふらん

へ奉行所をすかす普請場

植込のはびこる枝を見繕ひ

へ敷ものしかせ月を待くれ

へちぎり置程身にしむる閨の内

戸ざしことくた、く秋風

とらへんと思ふ水鶏の声はせで

徒然ながらも小田守る也

へ草堂を預りて住道心者

かはるぐに申念仏

へ千本の花は間もなく散か、り

「(7オ)

「(6ウ)

馬場の月にと出る春の夜

霞くむみだれ心のにおどり

猿引つるゝ祝言の宿

へ里ぐの麦や漸こなすらん

井手をなをすは雨の用心

へ鯉鮒をあまたいけすにため置て

殿の御成の日はさだまらず

へ兼てより諸卿の歌はとをり題

静謐なるは世のまつりごと

へいづくにか鬼神は出て住ぬべき

へ心からこそ夢にをびゆれ

へ明暮の思ひには身の草臥て

へ瘦ほそりけり長旅の道

かるき荷も次第に馬の負せ兼

さがりぐちなる市のうり物

へあつき日をいとふ肴の塩加減

へ野がけの客は待にをそしも

草ぐの花に一首を詠じ侘

へなみだながらもまつる聖霊

へ敵の世にしのお心を月もしれ

東くだりの道ははるぐ

へながさるゝ身は我からの色好み

へ渡りそこなふ恋の中川

付ざしの過しはいかに舟遊び

餌にかゝらぬや釣針の魚

かき曇る空は俄に雨となり

へこゝろにかなふ勅定の歌

へ望みしをゆるさせ給ふ花の枝

かすむ不審はふかき経説

石塔の字は春の日とばかりにて

へうち死せしはあはれ大勢

さくるとは夢にもしらぬ火矢の筒

へなべて治る国の守護人

付墨五十六句

内長十二

第三

恋何

田立

やうく秋の彼岸ちかづく

ひゆる身にすゆる灸の火をこひて

へ露の命や蘇生りぬる

へ天の川とわたる船と詠じ出

へえあはぬ中を月もしらしめ

奉公のいとまを二季に定め置

帳のおもてにたつる勘状

へ開陳に功ある武士を召出し

いけどられても思ふ主命

義理ふかき辞世の歌は哀にて

へなみだながらに拜む石塔

片時だにはなれはせじと契り置

へやさし若衆の煩ひの伽

ふと股をつくにをそれぬ心にて

へかり場の末に返すゐのし、

弁当は谷を隔てひらくべし

へ禁酒の札は寺の領内

一里の飢饉は何のゆへやらん

へ落花枝に帰るは風の柳かな

へ漸庭に巢だつ鶯

時鳥春の陽気や請ぬらん

植る時分をおもふ苗代

へ照つゞく日和を怪る村の者

月に材木出す谷みち

霧深き岸にあぶなき馬の口

身にしめ給ふ大将の下知

神前に数の願書を読上て

へ科をくやむやながさるゝ袖

へ孕ぬることを世間に忍びかね

へ遂てたてんはいかに若後家

へ摂待の茶はかりそめに成がたみ

〔9オ〕

〔9ウ〕

御湯まいらする氏の荒神

へまよひ子のなきをば歎き悲しみて

へ月くらき夜の山猿の声

しんくくと露しづかなる柴の戸に

へ身にしむ琴の音色いとをし

へ風ふけば君の行衛を案じ侘

へ御座舟うかぶ大海の灘

へ皇を田舎に移し奉り

新規のさとの宮の造営

ちからにはをよばぬ山を引ならし

へ谷に地震のゆりぞしづまる

へせめよする出城に時の声立て

船のみなとは国のさかひ目

へ売買の日どり定めぬ市の棚

へ作りつゞくる京の町く

へ行幸の道を奇麗にはき清め

すへつゝ出る小たか大鷹

月花とあふぐは殿の朱印紙

春にさかゆく加増の領地

へ氏寺の普請長閑に出来立て

へ春日の里に勅使いそげり

へはるくくとむすばん縁を望かけ

へ参りて祈る鐘の緒の願

平産は成がたからじ年の程

へまだいたいけに思ふ親の身

生れつくくせはなをらじ舞の袖

をどりの場にあはぬ手拍子

月まてば伴ひつるを見はぐらし

へはつあきなひは時の売がち

浜入の舟は一度に風そひて

へ神の威光にそむく夷等

王城へ東のはての程とをみ

へ鳥の名をき、泣なげく人

へ暁のわかれにひしと手をとらへ

へ旅籠の銭のたらぬ算用

日をかさねのびて飛脚の上り着

〔10オ〕

〔10ウ〕

〔11オ〕

節句の祝儀申若殿

へ物数奇をのほり甲にこのみなし

へ討死せんは老のめんぼく

へ忘れぬ形見の鼓こゑ出て

徒然ながらも住吉の里

月寒き夜すがら守る宮すゞめ

しのびて森にはる天の網

川狩は我をとらじと仕廻のき

水におほれていかにおさなひ

へ瓶を割智恵こそ深き花心

へをくにかすまぬ占の一流

初夢にほの見し君に参り逢

へ神慮たうとく思ふ手枕

へ煩ひのをこたる若に乳をふくめ

へわが身にしるきたらちねの思

へ草も木も雨露にこそそのびあがれ

へ松茸は何見えぬはげ山

谷ぐは月に貴賤の道となり

「11ウ」

洛中ちかき相坂のせき

へしばしはと清水に駒の息つかせ

追ちらしぬる敵はちりぐ

へ一筋の矢先も千の霰にて

自由自在にきりたつる石

へ垣ぐるゐは朽やすかれや領さかひ

へ人にとらさじため池の水

よりぐになぶれば魚のそだち兼

わらんべどものやむる野遊び

へ化物といふはあやしき石仏

ふらりぐとなやむ辻風

へちらと見し花の匂ひにあこがれて

いつたりやまんなみだ春雨

へ折ぐにかすむ鼻血の気にかゝり

へ縄をばいまだつけぬあら牛

付墨五十四句

内長七

「12オ」

「12ウ」

第四

笑何

円立

へ郭公なかぬといふや文字の声

へ花たちばなをむすぶ詩の作

築山の陰に酒宴の座を組て

暮まち出るため池の月

へ露の間も人氣や亀のをそるらん

へ身にしめにけり品玉の曲

打寄てつかん手鞠の拵に

おさなき袖にざれかゝる猫

あたらねど寒さ忘るゝ火燵の火

へ酔をすゝむる鍋はおもしろ

うかれめは望む扇子を舞納め

色にはうかと心まよへり

へ散花に山の道筋埋れて

へ再興もなくかすむ古寺

月ならで雪間に遊ぶ昼狐

へ菜摘女のけはひおかしも

御神事に縁の遠きや折るらん

思ひつもりの煩ひはうき

へこはれぬる借錢の利を侘かねて

へ身のありつきをかせぐ牢人

へ重代の太刀の系図を言ふらし

ひらきはじめていはふ宝蔵

へ大黒の棚に御注連を引渡し

へ花をかざれる市の売もの

へ傾城は数の小袖を着かさねて

へ人になさけを何かけ踊

しらぬにも月をゑしやくの酔心

古郷の秋をおもふ船旅

ばら／＼と落武者と成くづれ口

縄きり放す城のかり壁

へ勸請の宮の普請の出来立て

〔13ウ〕

へ致景ことなる大原の山

へ隠遁をとげて心のすみ所

へしよろ／＼河を汲閼伽の水

帷子のしほたれぬるをぬぎかへて

とりまかなへりはかまかたぎぬ

月代のあがりし影を待まうけ

露もたがはぬ御出うれしも

へ身にしめて頼むかひある占や算

へ眉目も心も嫁のなりふり

夜ありきに名の立袖も止ぬべし

へねらふと聞ばうき敵もち

子の親となるも漸昨日今日

へ器用はあまる家の一芸

商ひのかねをそれ／＼濟させて

へ日和次第にみなど出の舟

旅籠屋になじむせんなき中となり

かはす扇は執着のたね

へ春の夜に忍ぶは花の数奇心

へおしむをぬすむ梅の一枝

鶯の巣だ、ぬ前に気を付て

へのぞむはつ音をなけ郭公

たまさかの客は嬉しき五月雨に

琴引給へ琵琶を調ん

徒然さを月の夜すがら明し兼

露のなさはあまのごと候

かりそめに薄の中にころびあひ

へ火をつけんをや侘るむさし野

物とりと知で盃とりむかひ

すゑ繁昌を思ふ市の場

住吉の松原くはつと打晴て

へ淡路の景はあさ夕にこそ

へ逗留はしばしと磯のあまの家

へなき跡をとふ廻国の僧

苔むしてさだかに見えぬ塚しるし

へ里はなれよりかゆる近道

へ植付る田面に水の用意して

〔14オ〕

〔14ウ〕

〔15オ〕



雨ふらぬ間にいそぐ川よけ

へさび鮎はやがて落来ん築の棚

山家に秋の祭おもへり

送り火のために椎柴刈置て

へ月にはらふやはやり疫病

御出家の勤めたうとく拝みなし

上下をわかぬ旅のつき合

へ遊君は我身ながらもまゝならず

へ罪科は何誓言のほど

へます花に見捨られしは二世の中

あはれ継子の涙かすめり

余りぬる寒さにおどす轡づら

腰うちぬかす雪の山道

へ横鐘にかへせる鹿をねらひとり

機嫌の程はさぞな若殿

へ聞しより器量こと成御れう人

祝ひによせてよむ恋の歌

へ相生の松はあやかり物なれや

へ父母をおもふは深き孝行

へ明暮に参り下向の墓所

若後家となるすくせつたなき

へ小野に住袖をいたはり忍び寄

へうか／＼たどるふか草の道

くちなはや月くらき夜に出ぬらん

へ庭籠のうちにおらぬ色鳥

秋よりも児はおとなに成給ひ

紅葉にそふる文の取やり

へ杉折は思ふが方の見廻にて

かこふ芝居はふり袖の能

へ産砂を造営しての宮うつし

ふたゝび取や本領のぬし

此春は実植の花見もよほさん

へおほき孫子の末は永き日

付墨四十九句

内長四

「15ウ

「16オ

「16ウ

第五

一字重転

円立

へ日当りや花に見るてふ梅の雨  
 へ園にのび立夏草の精  
 へ秋の季は虫の音色に顕れて  
 うそさびしさや月の暮かた  
 へ霧ふかき入江にしばしか、り船  
 へ波のよどみに釣棹の魚  
 真砂地に伴ひつる、子共ども  
 寒さいとはで相撲取也  
 へ祭礼の三木をいたゞく夕ま暮  
 へおもひかけぬる願は嬉しき  
 へちらと逢縁の程こそふか、らめ  
 へ孕し事は夢かうつ、か  
 我年のよらぬ心は不思議にて

〔17オ〕

へあけてや内を見る玉手箱  
 へひめ置て稀成歌の相伝に  
 賤しきとても位たまはる  
 へ眉目よきに似たる女の心ばせ  
 へ見るにおもひのまさる文体  
 へ二道を今までしらず契きて  
 敵に降るはいかにももの、ふ  
 花ならん時世を月に念じ置  
 へをしへのどかにとかん正法  
 幾春か君をそむかん夷島  
 へつるに赦免のあらぬ左遷  
 守り立る子をなぐさめに後家をたて  
 へ売ははなさじ重代の太刀  
 再興のなきとて神慮かはらめや  
 へ国のみだれは時の運命  
 かしこきは竹の林に逃かくれ  
 へ網に雀のかつていらざる  
 帰らんと酒あた、むる幕の内

〔17ウ〕

先御覽あれ山の端の月

旧跡となる池水の冷じみ

へほこらに籠をまつる幾年

あれし田も次第く／＼に出来そひて

里のあたりををづる獸

へ逸物の犬は声にもかくれめや

夜半に相図を思ふ城ぜめ

月に打碁をかこつけのえにしにて

へふそくながらも折菊の枝

へ重陽は心ばかりの身の祝ひ

へ作り習ふはおかし詩の韻

禅法を悟りし体にまぎらかし

へ蜷すくひくふ坊主何そも

名にきけど終にみなれぬ川童

水におぼれてあはれ幽霊

へ恨てもかひなく腹やたちぬらん

へのろひしは身にむくふ後妻

誓文をいかにわする、花の袖

「18オ」

へかすみの酔の見えぬ顔つき

余寒にや葉も廻りかねぬらん

灘を大事におもふ唐船

へ海賊は湊く／＼を制せられ

立さがらぬはしるき市の場

へ入ごみの風呂の戸口やしめざらん

ともに潮をぬるは病人

へ乞食と成も命は捨がたみ

一度はめぐりあはん約束

へ二世かけて送るはあはれ状の内

ふるさとさして落す郎等

若君をあやしき体にさまをかへ

へふりをそろへて踊る広庭

へそこく／＼に石を直してつきの暮

へ身にしめつ、もうてる双六

露程もへだてぬ中はくつろぎて

へそひ寝うれしき肌の帯紐

へせめてはと形見の小袖取出し

「19オ」

「18ウ」

へあたる忌日にあぐる諷誦文

栄行一寺の祖師をたうとみて

へ花の名所となりし山ざと

鶯は谷に毎年巢を作り

春に霊地としるき岩ぐみ

月影は広き世界を照させて

へあしはら国や一滴の露

人種やむかしの秋を伝らん

へ刈こむ稲の知行おさめん

山公事の互の意趣を言なだめ

へ神の威光は何御輿ぶり

草も木も王地と知ぬ諸軍勢

難儀はさぞな大風のふね

弟を人商人に買とられ

へ傾城となるはていかゞせん

形見とはへらず口なるうつり瘡

あかづく袖の着がへやはある

へ長旅はあつさ寒さをしのぎ来て

へ帰朝はさこそうれし入唐

へ仏道の修行は身にやかなふらん

へ高雄のおくにむすぶ庵室

柴垣の内外くろむ花もみち

へなつく小鳥はいなで飛かふ

おさなきは心まめなる朝起に

へ書手習はまたきのふけふ

へ住給ふ小野はさびしき片山家

へ夢かと思ふ雪の道すぢ

へ鷹匠はそれにし空を尋佐

殿の御前のいとまこひぬる

へ奥方へしれんと思ふつはりやみ

さしちがへしは若気ゆへ也

へ盃の論はむやくの衆道事

座敷の奥の舞やはじまる

付墨五十四句

内長十

第六

何頭

田立

へかぞへねど三五の月の光かな

へ真砂に落る雁のあし形

秋に先鷹野時分や思ふらん

守護の入部を待請る也

へ両国の境の公事をわかち兼

一むらの田はみな作りとり

へ広沼に根からむ芦を堀尽し

へ手づかみにせり魚の数く

食物のあんばいは何異国人

医書を見るにはかはるる了簡

へ運氣こそ日なみによりてわかつらめ

へのびくになる軍の首途

へ剛なるも色に心のまよはされ

へくめるなさけを鬼としらずや

たはれめは座敷の首尾を持たれて

かへるさは何旅籠屋の内

腰錢を心あてにはつかひこし

かりきる船をあがる川岸

へ月さゆる名所をいかで見残さん

へ趣向をおもひとる歌の作

へ一枝の花ををくらん状の内

へ今朝の狩場の鳥は仕合

羽をのせる帰雁や雲にへだつらん

山をばあとにいそぐ船中

雨となる月の出塩を心がけ

へのぼる川瀬にとらん初鮭

在郷に秋の祭の時いたり

へ焼ぬる風呂は聖霊のため

客僧の旅のつかれをあはれみて

むかしをおもひ出す侍

へかゞみぬる腰にはあまる長がたな

〔21オ〕

〔21ウ〕

へ物見の場をわくる一礼

へいさかひは理方より先言なだめ

へつよき怪気もにくからぬ中

へあだぼれの我身の上をかへりみて

衣紋つくろふ鏡台の前

へ今にはや始る舞の幕の内

殿のおほせをうかゞひて見ん

煩ひの虚実は脈にかくれめや

へはらみし事をはちらへる袖

へむかへしはまた此ごろの嫁御料

へ老の隠居はいそぐともなし

上人の利益は広きすゝめにて

へ他力奉加の堂の建立

へ兵乱のあとを治る京田舎

へ月にもはこぶ年貢かずく

国替はかならず秋と定りて

身にしめつゝも望む受領名

へ芸能は世にたぐひなき花心

〔22オ〕

ながれたつるは春に時めく

付ざしの霞に酔る胸の内

へきつきたばこの色好む袖

山居せし徒然はさぞと思ひやり

けぶりちよろく絶ぬ炭籠

つかふべき葉の勢をかんがへて

ねらひをためず鉄炮の筒

引うくる敵をいかでかのがさまじ

へゑひずはしらぬ神力のほど

へ草なぎの剣は名高き宝もの

ひろひもとめん鹿の落角

朧夜の月にといそぐ奈良の京

へたきゞの能の役はそれぐ

禁中の御庭に衛士はかしこまり

一やうにたつ車かずく

へ織機の糸の色よく染わけて

へ賤も嘉例の星をまつれり

露の身を未来の為に念じ入

〔22ウ〕

〔23オ〕

へいのちかけての誓紙冷じ

へ密通を夕の月にあらがひて

へ謀叛の者をからめをく也

都には近きあたりの鹿が谷

なみ木に花を植る氏寺

年明て鐘の供養を思ひ立

へかすみきこゆる千日念仏

行とまる旅宿をいそぐ山づたひ

雨もかまはでひく高瀬ぶね

へ催せし綱を手にく取さはぎ

時をさだめてひらく本尊

偷言の勅使は嵯峨を詠やり

へ駒をはやむる名月の空

抜懸に最期の程を身にしめて

露なみだにや落る郎等

故郷を思ひ出せばやるせなや

へ寝言はさぞなあたりはづかし

へ恋するをかくす病の身につのり

へ若者だては老に似あはず

へ春風にし染し小袖を取かさね

ねらふかたきの油断待ぬる

へ面白く琴の唱歌を作りなし

やくそくの夜は心いそく

へ給はれる文をしかく読もせて

へ涙にひたす形見の肌着

へ今ははやうみてかひなき子をいただき

小幡の里にいそぐ雪道

へ鳥落す用意しなぐ申付

先敷物をいだす山かけ

へ茶を吞て扱見めぐらん花の本

かすみはれぬる拝殿の前

へ春の夜の通夜に夢想の目は覚て

へふしぎの縁となるひたち帯

「23ウ」

「24オ」

付墨五十二句

内長六

「24ウ」

第七

浜何

円立

へ菊は測匂ひや四方に流川

へなびく尾花は風の立波

月にひらく荒田に露の時雨来て

土手のかたへにおる、白鷺

へ水上のたまりにぎこやこぞるらん

並木におほふ西日さす影

へ広庭に各鞠をもよほさん

ひとつはきこしめせよさかづき

眉目よきに昔をおぼす恋心

それとかくれぬむらさきの上

へ忍びよるふとんに伽羅の匂ひして

へはなれがたきはふところのうち

へ愛らしき児を添乳になでさすり

うか／＼くらす長の留守の間

へ遁世の心ざしとはいざしらで

へ聞そこなへる歌のてにをは

へいつこんと契りて帰る肥後の国

舟路のわかれしたふ遊君

月寒き湊の市を売仕舞

いざ打寄て酒をはじめん

へ此花の陰にと幕を取出し

勧進的をたつる春の野

牢人の果は霞と埋れて

へ名は末代に朽ぬ古塚

へ上作の太刀の刃をとぎへらし

いかでこたへん長の籠城

水を取山の樋の口切とめて

へ田のほそ道を付かへにけり

へ草はこぶ馬は重荷のかたさがり

昼弁当をちとひらかせよ

山／＼の景に目とむる沖津舟

〔25オ〕

〔25ウ〕



血死期の汐に出る夕月

海士人は蓑に草鞋身に入て

里はなれまでをくり火の影

へ声くくに門田の虫をはらひ立

三木をいたゞく氏神の前

へいつしかと思ふ産屋の忌あきて

余所女ぐるひはなをる若殿

心中を立て讒をし言のがれ

へ誓ひの文の返事うれしも

相伝は稀なる芸を望みかけ

へ武略のこうは分別による

へおめくとかひなき命たすけられ

へ玉のひかりを摺あらはせり

へ一旦はあたりてなやむ目の葉

へ月日をかぎる疱瘡のあと

奉公のひまを秋まで申請

へ敵をねらふ心すさまじ

へ花とのみ契りし中もうそとなり

〔26オ〕

へさめてくやく思ふはつ夢

へ別れをも霞の酔にはたと忘れ

へ旅の首途の機嫌ことなる

詠じぬる歌やまことになふらん

へかたじけなしや神の詫宣

へ心侘る空は俄に雨となり

堤も水のきれて行跡

へはねまはる魚を手取の池の面

岩まくに鴉はむらく

心から魔所とや見ゆる愛岩山

へ住はてがたき嵯峨の庵室

へ落人と成行末を月もしれ

露もわすれじつれあひの事

へ秋とだに思はぬ若を形見にて

へ義理につまれば起す道心

へ主君とて又誰人につかふべき

在く所々に国替のせつ

まつりごとたゞしからぬをにくみたて

〔27オ〕

〔26ウ〕

へあかぬわかれの后いとをし

へ写絵に花の姿を書ちがへ

へなみだにかすむとぶらひの場

焼風呂の烟を東風の吹立て

へそれとしれぬはあたら名香

へ天笠のりうさの川の瀬はかはり

へ毒蛇のかたち見るもおそろし

へ罪人を地獄の沙汰に顕して

過去と此世をしるはかしこき

月も日も座禪の床にとぢ籠り

へらうさいやみはうたて身にしむ

へ恋慕にも露の命のおしまれて

へぬしあるかたへ文はえやらす

傾城にらくくと気のうつりそひ

へいたづらの名のたちし若後家

血の道はをのづからこそ発るらめ

諸病は脈に先あらはれん

本性は縦なくとも酒の酔

「27ウ」

へ利を理にたて、つのるいさかひ

へ内典は外典より世にもてはやし

奉加をいる、寺の再興

山陰の空に紫雲のたなびきて

先鋒營をやむる狩人

化物のなりは心に分がたみ

へ御殿の内の上下さはがし

へ二道に思ひし武士は誰ならん

文をしりたる袖はまれなり

さすらへをなげく心の殊勝さよ

へ法をふぞくの師に頼みぬる

汲はこぶ開伽に毎日身をやつし

一夏の間たつる花入

へ茶の湯をし伽に隠居の住所

へ孫子のすゑの繁昌はそも

付墨五十四句

内長九

「28ウ」

第八

三字下略

円立

- へ下戸上戸まじるや貌の村紅葉  
ちとせの菊を祝ふ賀の席  
へ月に読当座は古歌をかた取て  
見るにえならぬ名所の景  
へ行旅の足を休る茶屋の内  
へ荷ををろしをき馬草飼也  
へ刈たむる柴をほさんの用意して  
へさし図はいまだ出来ぬ土橋  
へ泉水に根深き岩を直しかね  
きりかゝむるはおしき松の木  
へ下草のたらぬ花瓶を見繕ひ  
へ秋につとめん仏前の経  
へ聖霊を祭るは暮をかぎりにて

〔29オ〕

- 月にいそぐや葬礼の輿  
嫁入の作法おかしく祝ひ初  
似あはで見ゆるふり袖の紋  
へ行年をかくす心のなまめきて  
へ身のすぎはひはうき道のもの  
へ追はぎに往来の人のなやまされ  
はなしに聞はいかに旧跡  
へ神木の花をみやげに手折かね  
穴を出たるへびやをそるゝ  
たまりある水は蛙のたよりにて  
そろりくくとひらく蓮の葉  
へこは飯を上座より先廻しそめ  
あやかり物と祝ふ髪をき  
へ諸共に幾年をふる祖母祖父  
へ名木となる高砂の松  
かずくゝの集に瓦上を詠じ入て  
こゝろふかくも山居せし跡  
へ古井戸と草生茂る闕伽の水

〔29ウ〕

風呂の勝手を直す禪寺

へ詩聯句の後は茶菓子を調て

暮の月見は適の珍客

約束の程身にしむる忍び妻

へ秋にはなさじ帯のむすびめ

へ血の道はうぶやの物と気づかはれ

常にもちゆる料理の仕立

へ上下をも撰ばぬ旅の泊りにて

ふしぎの縁や名のり逢袖

へ祈りしを糺の神はしろしめし

非道なりとは御圖あらはす

鉄火取その手の内は焼とをり

へいかで王地に鬼はすむべき

へ節分の大豆は上古の例として

へ舟乗そめん月の寒空

山川のせばき流れを切ひろげ

へたつる伽藍にえらぶ境内

大木となるべき花を植付て

へ埋む死骸はかすむ名ばかり

獣は荒るをまゝの春の野に

年貢さだめぬ寺の領分

一里をたてん新地を申請

へ先高札をあぐる市の場

へまよひ子に迷ひは同じ親心

おもひやらるゝ六道の辻

案内を頼むかたなき山のおく

へなり行はてはあはれ落武者

へ橋板のなきを夢にもしらはこそ

へ異見をきかで忍ぶ月の夜

懐妊をながすもうしや冷じや

へ終に比丘尼を落る露の身

へ一旦の恨みは根ざしふかゝらで

返事せざるをくゆる玉章

新発意は何れをとらぬかぶる立

すこき鞍馬のおくの山ずみ

炭をやく煙は空に舞のぼり

「(30オ)

「(30ウ)

「(31オ)

へこがねの位わかつよしあし

へ罪科の数をあの世の帳に付

年忌くを問はたうとき

へ釈迦仏のむかしを今に聞伝へ

魔のなすわざの方便おそろし

へおもひ共よらぬ悪女におどされて

外にもる、はうたて蜜通ミツトウ

へ惣領にゆづらではやは家の芸

やまひのほどのすゑいかゞせん

へ月花を心にこむる歌の作

さすが長閑に見ゆる庵室

へ軒口に書かすめたる額の文字

療治のほどはいかに目ぐすり

牢人を恥て名氏やかくすらん

へとかく花車成息女子のなり

へあだめくは躍の拍子そろひかね

新酒の酔のいきりつよさよ

へいさかひに月見の庭を立やぶり

かきの外面に出る児達

へ蹴あげたる鞠にや風のあてつらん

ちらりとみすのおもかげは何

へ螢をし女車になげ入て

涼む川辺の戻りにぎはふ

へめんくは思ひくの夕はらへ

へならぶ竈のうちいはひせり

へ正月のちかづくからに餅つきて

里帰りには姫ぞはえある

薰物のかほる小袖の下がさね

へあらがふ事は何余所心

へ長くと思はぬ留守のくるしまれ

その月まではまたじ小産

奉公の隙のさだめは花のころ

へ去年より灸をのばす六尺

「31ウ」

「32オ」

付墨五十三句

内長六

「32ウ」

第九

何餅

円立

へ入くめば雪折竹や花がたみ  
 霜にいたまぬ梅の早咲  
 へ北窓を南おもてに付かへて  
 へ月待がほに夜半の学文  
 へ歌よまん伽とこそなれ虫の声  
 露しんくくと見ゆる草村  
 へ名所とは石居ばかり跡絶て  
 川の瀬筋にかゝるかり橋  
 霊仏をおがませにけり山隠  
 時ならざるや釣鐘の声  
 へ盗人の入かと今宵あやしまれ  
 夢もあはざる旅籠屋の内  
 流さるゝ哀をせめて月もしれ

翻刻『天神の法楽』

〔33オ〕

なみだの露は袖にたらく  
 へ形見をば秋にはせじとだきかゝへ  
 へそだつるこそはいたいけざかり  
 へ先へ行跡より猫のざれあひて  
 へ庭にとび舞てふの羽づかひ  
 へ日あたりは梢の花の咲そろひ  
 つゞきて幕を春の山かけ  
 へ陳取のそなへは谷をかぎりにて  
 へ自領他領はしるき猪がり  
 入国に古き家老を召出され  
 あらはれぬるは讒言の科  
 我眉目のよきをや鼻に当つらん  
 へ扇かざしてたてるふり袖  
 へ今やうの舞のあげはを打忘れ  
 心はわかくいさむ酒もり  
 へ討死を思ひ定る首途にて  
 へ跡を見をくり送る兄弟  
 葬礼の棺を野原に埋みすて

〔33ウ〕

こゑ冷しくほゆる狼

へ月に行旅に小荷駄のすゝみかね

はつ塩時に出さぬ船着

へ落人や吟味にをよぶ関の口

読上にけり往来の巻

へ手習は心さかしき勤にて

家につたふる糸竹の道

へ神墻や共にさかゆく奈良の京

へ八重にさくらの名木の枝

短冊の作は長閑き詠にて

へ軒の風鈴にあつる山かぜ

へ灯明をかゝげそへぬる堂の内

へ地藏まいりは引もちぎらず

鰐口の緒は平産の祈りにて

ひとりむすめを思ふこゝろ根

へ入道は播磨の国に住どまり

へ君の宣旨を終にそむけり

へ月花の世をうき物に通世し

へ嵯峨野のおくにかすむ庵室

鹿をひし跡は雉子取番所

年貢のたらでうたて麓田

牢人の身をいづくにかかくすべき

へ死なん命をのぶる悔しさ

へぬしあるか念比ぶりを忘れかね

肌の守りとおもふ玉章

人の名を我を忍ぶと心得て

へ大わらひにやなる源氏酒

おそろしき鬼をほろぼす悦びに

へ建立ありし観音の寺

あまりまで石山風につよくして

へ矢橋の船はのるものぞなき

月影は遠のきてこそ水のう

へ硯をみがき星に手向ん

我年に誓紙の科を身にしめて

へ知音の中をきるは若衆

へ給はるを見るに涙の鬢の髪

「(34オ)

「(34ウ)

「(35オ)

へ遠国よりもなき跡の伝

へ夢さめて我とおかしき旅枕

めんつの食のゆげはたゞざる

耕作はいそげどはかもゆかぬ間に

雨を気づかふ山川の水

へ程遠き谷の筧をやりわたし

月も涼しくすむ唄づくり

里々を皆一面に見はらして

へ領知のさかひおもふ所知入

松原や花を並木の道きよめ

へ長閑に御戸をひらく本尊

へ春の日に祖師の年忌の廻りきて

へあはれかなしきおとゝひの中

へ立わかれないなばの歌の下心

見すて給へる状の文体

へ思ひ切ゆびを手にだにふれもせて

とかくなみだに袖をひたせり

へ子をもたぬ間はしらで憂親の恩

楽にうかゝをくる月と日

遠島を霧に見すかす船の景

むかしの秋を残すふる城

神木の紅葉に宮は埋れて

へ泊りどころを鳩のまどへり

蛇やのたゞ穴を出つらん

陽気に水のぬるむ川岸

へはびこれるしだれ柳の枝うたせ

へ庭の花見の時分待也

へ鶯の初音を君の相図にて

伽羅のかほりをしたふ蜜通

へ逢事はとてもかなはぬうへつかた

へかたきをうたであはれ発心

片輪成身をやつたなく思ふらん

終に儒学の道に入ぬる

「(35ウ)」

「(36オ)」



第十

何硯

田立

へ寄波の数取となる千鳥哉

浜の真砂に拾ふ石花貝

へ塩竈を作る用意や致らん

新地の里のつく山口

へ方々へ売買をなす市の棚

掟をまもる関の戸の番

船入の湊を月に付かへて

へ秋にひかんとたくむ大網

へ吹そむる嵐につるゝより鯛

舞さがらんの鴟の羽づかひ

焼あがる火のいきほひはしづまりて

へあはれさまさる葬礼の場

へ追腹を思ひ切こそたゞならぬ

〔37オ〕

へ生どらるゝはあやし落武者

― 山道をしらぬ他国にふみ迷ひ

へ通力をなす天狗おそろし

へ仏法の我漫をいかで身にしめん

鑄なをす鐘の成就する秋

燈籠は月にかけて置願ほどこき

へ神やみしめの繩のむすびめ

へ名木の花のまはりの小柴墻

真さかりなる庭の山吹

約束の客を春迄ちがへ来て

へ病後を人に恥る傾城

へ思ふをもおもはぬふりに作りなし

へ似ざる御影にむかふあはれさ

へまだきより終に出家と成給ひ

へそれとさだむる位あらそひ

へ下されて読奉る歌の題

へ土産に折し花の礼状

しゐられし霞の酔の今朝醒て

〔37ウ〕

へ日も永旅の用意いそがし

へ塩時を月の出舟にくりおぼえ

へ釣に鱸をとりやためぬる

御申はのびて秋にや極らん

夏のをこなひのしげき名僧

庵室の住居涼しき紫野

へ池のぐるりに咲かきつばた

ことふれる島にはこらを祝ひ籠

船の見付にあぐる灯明

へ宵よりも祭の供物拵て

へ地をつきそめん日どり時取

へ藍染をいそぐ木綿の色を思ひ

へ余所目はれなる幕の紋形

へ陳小屋の行儀をたゞす物頭

頓而と殿をまてる鹿狩

百性は実のらぬ稲の訴訟事

月に御鬘をたのむ神職

へ眉目よきに縁の遠きはいかならん

涙ながらに行国はづれ

へ科なきも終に流人と定りて

こゝろのまゝに説ん正法

へうたがひを晴る後生の夢の告

へ雲間に拝む弥陀の来迎

山ごしに待月代の影さえて

へ渡る真鴨をねらふ木の本

そろ／＼と岸のかたへに船よせん

へ又と見られぬ名所旧跡

へ書とめて人にかたらん歌の作

へおもひながらも夢はおかしも

へかいさまによるの衣を着かさねて

へしゝたるゝ子をいとふ賤の女

へ織機のあたりへ猫やよせざらん

雀かふなりけふの里ずみ

へ疱瘡を大事にみちの国ならひ

守の札をこふはうぶすな

みだりにはいかできらせん森林

「(38オ)

「(38ウ)

「(39オ)

花の時節を思ふ冬枯

へちらくくと降を詠の庭の雪

書物にむかふ学問の床

へおさなきがはやおとなしくならせられ

へ心ばかりのかよふ御簾ごし

へ死霊や加持に恐れをなしつらん

終にいとまをもらふつれあひ

きる髪を忘れ形見になげ出し

へ衆道の意趣をわぶる元服

法師だに月に輪廻を離れ兼

へとぶらふ罪はふかき雲霧

殺生をなどかこのめる老の秋

へ例をたゞせる位むつかし

へ神主と成べき筋はたゞならで

しらがになれど髭はえそらず

重病は智職も祈りのけがたみ

へ心からこそおづれ野狐

今までの縁やうかく思ふらん

「(39ウ)

へ子をもちてよりやむ余所狂ひ

我家につたはる職を取立て

氏にはよらぬ聖代の道

へ秀逸を撰び集る言の葉に

あふはふしぎや袖のうらなひ

へ月くらく何しにとはせ給ふべき

へ風こそならせ萩の戸のくち

鈴虫の籠かと鈴のぶらさがり

まもりをかくるわらはべのお乳

へ世にはやる煩ひをのみ気づかひて

あゆみをはこぶ明神の前

へ拝殿のねだの木敷をけづり置

へ能をもよほす祭ちかづく

へ月末に花や咲べき奈良の京

へ子孫さかゆく北の藤なみ

付墨五十八句

内長十

「(40ウ)

「(40ウ)

物のよしあしに勝負の見えざるは、しれがたし。人の心  
ぐくかはるゆへなり。判者と定れる人、かゝるまよひは  
あらざるべけれど、それにも流々ありて、大かたは右左  
とわかつて。此千句、我に批判せよといへり。年来、聞  
馴たる作者にて、他にかはり、世のはやり事にもうつら  
ず、付合をもたづねず。唯、心のかよふ事のみを尽し、  
うはべはなだらかにて、「(41オ)したに風流を思ひこめら  
るれば、大河の測瀬をしらで、わたりをまどふがごとし。  
それを聞そこなはんは、ほゐなき事なりと、心をとめ、  
墨をつけけれど、彼浅瀬をも測かと思ひて、あぶなく  
をよぎわたるに似たり。老て目も耳もうときゆへなりと、  
おぼさるべし。

寛文五年

三月中旬

立圃

「(41ウ)